

日本

## ハンザキ研究所ニュース 2008(5) : 通巻 28 号

発行 2008 年 4 月 30 日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川 292

Tel/Fax:079-679-2939

E-mail : j-hanken@sasayuri-net.jp

日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....

### ハンザキ研周辺の禁漁区とモンドリ調査

昨年の6月に市川生野漁協から、学校の敷地に接している市川を禁漁区に指定する許可をいただきました。ハンザキのためにそんなことをする必要は無いのでは？という意見もあったそうですが、子供たちの環境学習の施設も完成したことでもあり、禁漁になればさらに多くの水生生物が生息することになるので区域外へも好影響を与えることになると思います。子供たちの魚取りくらいは高が知れており大目に見ていますし、団体での学習では終了後に放流をすることにしています。それでも銚やヤスを持って来る大人やアユが群れていたの釣りに入ったという困った人もいます。ヤスのお兄さんたちは腹いせに大小の石をあんこ淵に放り込んで帰って行きました。

さて、この川の生き物たちのサンクチュアリーでは今後どのような変化が見られるのか気になってきます。そこで定期的な調査で変化を見て行きたいと考えました。投網や掬い網では限界がありますので、モンドリを使うことにしたのです。モンドリとは「戻り」を付けた漁具ということでしょうか？早速、釣具店に出かけて網で作られたモンドリを購入してきました。実は、兵庫県では透明な材質で作られたモンドリは禁止漁具になっているのです。昔はガラス製で「瓶漬け」といっていたのですが、セルロイド製の「セルビン」が作られプラスチック製の丈夫な漁具も作られています。最近ではペットボトルで簡単に作ることができるので問題になっています。河川生物の観察会などで指導員がこれを使ってレクチャーしているところがテレビで報道されたことがありました。

この話を聞いていたので、ハンザキ研では事前に兵庫県水産課へ相談をして許可をいただきました。平成19年度は数回の試行で終了しましたが、本年度は4月から定期的に実施しています。第1回の調査では網製モンドリにハンザキの全長15センチの幼生が入ったのです。2歳半と推定できる貴重な個体です。長い間、夜間調査を実施してきましたがこのサイズのはなかなか発見できませんので、このモンドリ調査法は今後も楽しみになります。月に1回、透明なモンドリ10個を使つての調査と共に網製も同時に使用して今後の成果を見て行きたいと考えています。種類とサイズと数の長期的な変化を追っていけば禁漁区の成果が明瞭に現れるものと確信しています。年間を通じた今後の結果報告をお待ちください。

## 「アメリカの動物園で暮らしています」の川田健さんが来られました

4月12日にハンザキ研に来ていただきました。私は初対面だったのですが、何年か前から川田さんがニューヨークから手紙を下さるようになったのです。お名前だけはタイトルにあります著書（1988年）を古本屋で見つけて読んでいたので知っていました。宮崎大学農学部と同級生が冥土の土産に同窓会を企画されたそうですが、まだまだ矍鑠としておられ、お元気な様子でした。川田さんが私に関心を持たれたのは、日本動物園水族館協会の発行している「動物園水族館雑誌」に連載したオオサンショウウオの生態に関する私の文章を読まれたことだったようです。

川田さんは東京動物園協会に勤められた後、1969年に渡米し市民権も取得されたそう、カンサス州のトベカ動物園を皮切りにインディアナポリス動物園・タルサ動物園・ミルウォーキー動物園など多くの動物園に席を置かれて活躍されました。日本人がアメリカの動物園で飼育係をしていたなんて考えてもみたことはありませんでしたが、日本を飛び出してのことで、色々ご苦労はあったことと思いますし、これからも頑張ってくださいと思います。

荷物になるからと事前に送ってくださったお土産の中に切手シートがありました。写真2に示してありますが、10枚の切手が剥がせるようになっています。私が切手のコレクターであることを以前に手紙で書き水生生物の切手をお願いしたことがあったためです。有難うございました。どうもコレクターとかマニアというのは見境がなくなるので困ったものです。昔はどのような種類の切手でも数多く集めることをやっていたのですが、水族館に勤めるようになってからは水に関係するものだけにしました。

川田さんは神戸で同窓会に出席した後に、広島のアサ動物公園初代園長の小原二郎さんを訪ね旧交を温めたそうです。その他、姫路市立水族館、同動物園、姫路セントラルパークなどを歴訪して見聞を広めてきたそうです。お年なのにもかかわらず、まだまだ進歩することを忘れずに行動されていることに感心しました。出石川のオオサンショウウオの調査をしていた当研究所・研究員の柿木俊輔さんの案内で工事現場の視察もされました。日本の環境に配慮した河川工事の現状についての感想をお聞きしてみたいものです。

帰国された後もドイツやチェコ、ポーランドなどを一人で巡って来るそうです。本当に元気でいつまでも動物園や水族館への関心を強く持つておられることに敬意を表します。私も40年間の水族館生活でしたが、現在はオオサンショウウオのみを標的にハンザキ研の整備に集中していくつもりですが、ミニ・アクアリウムを出現させて楽しんでもあります。ハンザキの周辺に生活している水生動物をコレクションしての小水族館です。工事現場から救出したハンザキの幼生や希少淡水魚のアカザなども飼育していますが、こうなると長く留守にすることもできません。水槽掃除も大変ですが川田さんのパワーを頂いて頑張っていきたいと思っています。

地域とともに歩むハンザキ研究所  
 ～研究所の活動と黒川のむらづくりについて～ 後編

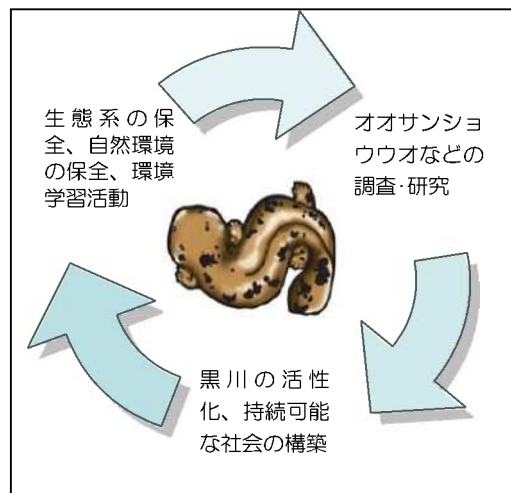
日本ハンザキ研究所 研究員 宮崎 隆史

地域への貢献

日本ハンザキ研究所は、これら多くの課題と魅力を併せ持っている黒川地域と運命を共にする覚悟をしたわけであり、地域が抱える課題の解決にむけても「そこに暮らす一住民・一団体」として取り組んでいく必要があります。日本ハンザキ研究所という組織の維持存続や連携ネットワークの強化、メンバーが行う支援活動や地域貢献活動の展開によって、「むらの維持」や「地域社会の存続」にも積極的に貢献し、「地域とともに歩み続ける研究所」を進めていくべきでしょう。持続可能な黒川地域の構築を目指し、ここに暮らす人々の伝統的な相互依存や協力関係などを基盤としていることを考えれば、エコミュージアムというよりもむしろコミュニティー・ミュージアムという表現のほうが近いのかもしれない。

島根県瑞穂ハンザケ自然館

同様の活動を展開している施設として、島根県瑞穂ハンザケ自然館があります。オオサンショウウオ(ハンザケ)を中心とした邑南の自然に関する調査研究を行っているほか、オオサンショウウオの産卵状況調査や、邑南に生息する動植物の分布についての調査研究を行っています。また、町内の各工事に関わる自然環境調査や保護対策の提案、来館者の要望に応じてスタッフによる館内の案内・展示解説などのほか、実際に町内のフィールドに出て野外観察の案内など地域密着型の活動も行っています。さらに、各地区の公民館や教育委員会などと連携しながら、自然を対象とした自然観察会や、講演会・研修会なども定期的に企画・開催しているそうです。町の合併によって、以前と比較すると十分な活動ができていないそうですが、それでもこの事例は日本ハンザキ研究所の目指す方向を示してしていると言えるのではないのでしょうか。



生態系保全のモデルとして

オオサンショウウオ研究の歴史は浅く、まだまだ解明されていないことがたくさんあります。しかし、ここ黒川の地で、「日本固有の身近で不思議な両生類」の生態を解明していくことによって、私たち人間が環境保全のために努力すべき課題が少しでも把握できれば、ひいては生態系全体の保全や自然環境の保全にもつながるのではないのでしょうか。また、黒川という一つの地域をモデルとしてや村落維持や持続可能な地域社会の構築に向けた解決策を模索することによって、現代社会に対して警鐘を鳴らし、人と自然の共存のあり方を提唱できるのかもしれない。「Think globally, Act locally」つまり、「生態系の保全と持続可能な社会の構築」にむけた一粒の糞として、日本ハンザキ研究所の活動が社会に寄与することになればと考えています。

## 仮設のレンタル・トイレ4基を設置

旧・黒川小学校でハンザキをシンボルとして「あんこう・ミュージアム」にしたらどうかという私の提案は当ハンザキ研ニュースNo.1で紹介しました。河川環境学習ステーションが完成し、昨年にはオオサンショウウオ保護センターもできました。教室も次々と整備して「河川工事」・「標本室」・「民俗資料室」・「レクチャールーム」・「第1から第5までの図書室」などの整備が進みました。そこでさあ！みなさんドンドン来てくださいと言いたいところなのですが、残念ながらそうは言えないのです。なぜかと言えば校舎エリアには浄化槽が無いのです。昔の貯蓄式から一時的に浄化槽も設置されていたのですが、長い間つかわれていなかったために、機能が失われているのだそうです。上下水道を整備するためには数百万円の経費が必要だそうです。朝来市へ毎年予算化をお願いしているのですが実現しません。

このような状況にあります、年々見学や学習活動の希望が増えてきていますので放置できません。やむなくレンタルの仮設トイレを設置しました。しかし、仮設では周囲から見えるので男性でもためらうところがあります。そこで、周囲を板塀で囲って屋根も自家工事で付けました。今年はオオサンショウウオをテーマに環境学習で知られている豊岡市立高橋小学校が幼稚園も一緒に全校で遠足に来ていただけることになりましたが、小さい子供たちに安心して使っていただけるか心配です。早くきちんとした上下水道が整備されることを願っています。

.....

## カエルたちの悲劇

最近あまり姿を見かけることが無くなったヒキガエルですが、研究所の周辺ではいくつかの産卵場を確認しています。林道の中央にできた水溜りで産卵しているところもあり、降雨のたびに流されて下流の水溜りにオタマジャクシが流されていくのを見ると、無事にカエルになれるものか心配になります。それでも、昨年と同じ場所で、今年も産卵していましたのでホットしました。しかし、周辺に肉片や内臓、骨、体内卵などが散乱していたのです。ある場所では皮がむかれて残っていました。

ヒキガエルは皮膚に毒があるので食われなかったと思っていたのですが新たな敵が現れたようです。京都大学の松井正文先生にお聞きしたところカラスとラスカルだそうです。カラスは腹側からつついて食べるそうで、そういえば、上野公園でつつきまわしてひっくり返そうとしていたカラスを見た事がありました。表皮を剥いて食うのは手先の器用なアライグマだそうです。アニメで可愛い動物としてペット人気の果てに捨てられて野生化しているのだそうです。産卵に集まったところを食われてはたまりません。駆除されているようですが、こんな所まで侵入してきているとは驚きでした。



写真1 70才を越えてもお元気な川田さんと



写真2 川田さんの切手シート (10枚の切手が)



写真3 但陽会館 (但陽信用金庫の美術館)



写真4 月1回のもんどり定期調査



写真5 産卵場で皮を剥かれて食われたヒキガエル♀



写真6 レンタルのトイレ4基を囲って

ハンザキ研日誌

2008年4月

- 3日 あんこ淵の黒主 (No.977) 年1回の捕獲測定、結果は一昨年の全長990ミリと変化無く、体重が4年前に登録したときの7, 3キロから測定のたびに減り続けて5. 35キロになっていました。
- 7日 豊岡市教育委員会・加賀見氏、日本モンゴル民族博物館・金津館長マイクロチップ挿入の実習に来所
- 8日 但馬信用金庫の助成金、採用となる
- 9日 生野町区長会にて日本ハンザキ研究所のNPO法人化の紹介と協力要請
- 12日 「アメリカの動物園で暮らしています」の川田健さんが来所
- 13日 モンドリ調査第一回実施、ハンザキの推定2歳半の幼生が入る
- 15日 兵庫県豊岡土木事務所とハンザキのカエルツボカビ症対策検討
- 19日 但陽会館にてNPO法人日本ハンザキ研究所設立総会開催
- 20日 三重県の清水善吉さん夫妻来所
- 23日 モリアオガエルの池の拡張土木作業
- 26日 レンタルのトイレ4基届く。本年は仮設トイレでしのぐこととなる。  
退所
- 30日 来所・GS-265 (265回目の調査)  
柿木研究員は株式会社キタイ設計を退職

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

今は夏の終わりの8月です。春先の4月のニュースを今頃になって思い出しつつ書きました。NPO法人の設立総会の準備に追われ、続くイベントや各種の委員会などで多忙を極め、折角のすばらしい自然環境を満喫する暇も無い毎日でした。NPO法人会員の皆様には翌月くらいにはニュースをお届けしなくてはいけないと思っているのですが、申し訳ありませんでした。

前号のNPO法人特集号でも触れましたように、私が一人で進めてきたハンザキ研究所ですが、8月20日には県の認証を受けて、即日に但馬の法務局に登録をしました。9月には特定非営利活動法人として正式に発足します。今後は、事務局のメンバーを中心に多くの支援企業や会員の皆様のバックアップを得て、当法人が長く存続し研究が継続されることを目標に、地元の皆様方と共に進んで生きたいと思っています。会員の皆様には直接お知らせしますが、会員以外の皆様方も当法人のバラエティーに富んだイベントに参加していただくことが、存続の源になりますのでよろしくお願いいたします。

この印刷物は、「セブン-イレブンみどりの基金」の助成により作成しています。